

あつを照つて時ふ畫工の又新新を教むに若く
— 莫き— なるがごとく— 奥に踏石ハ菊
名石ハ似て青黄赤の紙紙を更へて其狀就蛇
の匍匐もぐらもるがごとく— 果は岩穴あり上より
清水僅ハ滴るる心耳に流亡信是を以て
洗といふ形亦此ハ似て瑠璃を彫て其を
隱るが如く— 室中の要妙奇凡人の筆ハ及
ぶにあらざる予案するに貞觀年中を海山
上より海に流出— 大蛇の石ハ此— なる
ををりこといふ云事り— 一や邪代書ハ龍

ををりこと訓も或説ハ龍ハ就蛇の形なり
とあり— 又万葉集に吾国之旅可莫尔言而
令落習之摧之彼所尔塵家哉といふ歌有
古来夫人天皇
はま和歌なり仙曰おりこといふ蛇龍をいふ也後
西風古記令汲泉水有蛇チカミ龍リウ謂於云々常陸
風土記曰新沼郡驛家名曰大神オホカミ所以然
稱者大蛇多在因名驛家云々歌の心を記
し— 一や龍無きれを墨もて龍就蛇の石と云し
事矣此もも有りなりや貝系好古ハ懐文
中紀ハ帆柱石を記せしれ— 一東に室生石